
世界の爪弾き

春眠暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の爪弾き

【Zコード】

Z2186M

【作者名】

春眠暁

【あらすじ】

『希少すぎる存在』であるが故に施設へと閉じ込められた少女と、それを助け出した「私は貴方と同じなんだよ」と語る少女。『同じ』とは、どういう意味なのか。そして、施設から助け出した事の真意は。

親に裏切られた少女と、親の命で動く少女。
二人は果たして、『同じ』なのだろうか。『同じ』でいられるのだろうか。

白い施設

スポーツ選手や宇宙飛行士のように、たった一握りの人間しか就く事の出来ない職業は、人々にとても人気がある。

街に出掛けるだけで大騒ぎになり、行き付けのレストランではチヤホヤと持て囃され、子供たちは常にサインを欲しがり、行列が出来る。

幼い子供たちに、将来就きたい職業を聞けば、大抵の子供は「宇宙飛行士になりたい!」「サッカー選手になる!」と答える筈だ。

……だが、誰も、「『私』と同じになりたい」と言つ子供は居ないだろう。

それもそうだ。

一握りの内の、更に一握りの人間に對しては、世界は掌を返す。

希少すぎる存在には、人々は『憧れ』ではなく『恐怖』を覚えるのだ。

……当然、私に恐怖を感じない人間も、中にはいるだらう。

「何を言つているんだ、少し私達と違つだけじゃないか」と言つて、私を受け入れようとしてくれる人々も、もしかしたらいるのかもし

れない。

だが結局、私は嫌われるのだ。

彼らは、初めの内こそ良い顔をして近寄つてくる。

しかし、彼らはその内、私に『嫉妬』の炎を向ける。自分達が決して手に入ることの出来ない『能力』に対しても。

『嫉妬』は『怒り』へと変わり最後には『迫害』となるだろう。

自分達の手に入らない物は、目の届かない所へと追いやる為に。

……私は、何時からか、『私にしか見えない手』を伸ばす事が出来た。

その見えない手は、私のどちらかの手の先から伸び、私の視界内ならば、どれだけの距離があるようと届かせる事が出来るのだ。

物を動かすのに力は要らず、車一台どころか、家一個だらうと持ち上げられる。

傍から見れば、この能力は本当に便利で、それこそ『神からの贈り物』とも言つた所なのだらう。

……だが、私から見れば、こんなものは贈り物でも何でもない。

こんな能力は、私にとつては『悪意の塊』であり、私が忌み嫌われる存在であるという『象徴』だった。

始まりは、本当に小さな事だった。

4つか5つぐらいだった私が、私の『能力』を初めて使ったのだ。
……いや、『使つてしまつた』のか。

遠くにある玩具を取りたかった、と言つくだらない理由。 ただそれだけで、私の手からは『手』が伸びた。

この時の私の不幸は三つ。

一つ目は、近くの玩具を選ばなかつた事。 二つ目は、私が手を伸ばす瞬間を、母が見ていたこと。

……そして三つ目は、私の『能力』が異質なものだと、気付いてしまつた事だ。

私は普通の人じやない。 私は普通の人と仲良くすることが出来ない。 私が普通の人と共に過ごすのは許されない。

母が私の『^{おひな}行つた事』を知ると、すぐに何処かへ電話を掛けた。

それから直ぐに、青い服を着た怖い人達が私の家に上がりこんできた。 ……今思えば、あれは警察だったのかもしれない。

警察は私の体を押さえつけないと、抵抗出来ないよう^に押さえつけ、バトカーヘと運んだ。

『手』で抵抗すれば、もしかしたら逃げる事も出来たのかも知れない。 だが、足し算も満足に出来ない子供が、家を飛び出し、逃げ続け、一体何が出来る?

それに、手の出し方すらも知らなかつたのだから抵抗のしようも無い。

……そして、母は。

私が警察に連れていかれるまで、一言も、口を利かなかつた。

警察達は極秘で来たのか、乗つてきていたのはパトカーでは無かつた。

もしかすると、その時に警察だと分からなかつた理由は、それなかもしれない。

私を乗せた車が止まつたのは、大きな白い施設の前だつた。

……だが、私はそれからの事を憶えていない。

氣付けば、私は真っ白な部屋の中、テレビを見ていたのだ。

大方、薬でも打たれたのだろう。された憶えの無い注射の痕が、シャワーに沁みた事だけが印象に残つている。

……私が憶えている『外』の記憶は、たつたそれだけだ。

それから10年以上、私はこの『監獄』の中で生きてきた。

欲しい物は望めば手に入つたし、扱いも悪くは無い。

だが、玩具に飽きれば、する事といえば同じ放送の流れるテレビを見続ける事ぐらい。

寄つてくる大人は上辺だけの笑みを浮かべ、気持ちが悪かった。

人と触れ合う事すら許されず、自由に外を歩く事も出来ない。

だから『監獄』だ。

私の『能力』で車を動かせ、家を持ち上げる、林檎の皮を剥け。

そつ命令してくる白衣の男に反抗する事も無く、私はその指示に従う。

最初こそ反抗する事もあつたが、一度、強い電気を体に流された後は、従つたほうが良いと学習した。

母や父に、会いたかった。

それは今でも変わっていない。

私をここに引き渡したといえ、私にとっては、唯一『会話』の出来た人達だったから。

もしかしたら、私の『能力』を使えばここから逃げ出せるのかもしれない。

そうすれば、私の両親にもう一度会つことが出来るのかもしない。

……だが、それ以上に、怖いのだ。

幼い頃のトラウマは、そう簡単に払拭する事は出来ない。

当然、幼い頃から、反抗すれば電気や熱で『お仕置き』を加えられていた私は、もう、この施設から逃げ出す事など出来なかつた。

しかし、運命とは良く出来たもので。

私が諦めようとすれば、僅かな希望を口えてくるのだ。

これまでそうだった。

……そして、今回も。

私の背後で突然、大きな爆発音が起る。

驚き、慌てて振り返ると、私が人生の中で初めて見る、一人の『女
の子』が立っていた。

白い施設（後書き）

まだまだ稚拙な文章ですが、少しでも皆様に楽しんで頂ける文章を書いて行きたいので、「ここはこうした方が良い」など御座いましたら、どうか感想に書いていって頂けますと、とても有り難いです。不規則な更新になるかもしれません、これからどうか、宜しくお願い致します。

本物か、偽者か。

あまりに突然すぎる出来事に、毎日ダラダラとテレビや本を見て過ごしていた私の頭は、追いついて来てくれなかつた。

「……ん、いたいた。 やつほー、助けに来たよ」

そんな私の、恐怖と驚きが混ざつた表情の事などござ知らず、その『女の子』……歳は私と同じくらいだろうか？ は、場に合わない明るい声を出し、私を見つめる。

「え、いや、な、え……？」

私から聞いても十分に間抜けな声を出し、少々赤面してしまつ。

だが、それほどまでに私は驚いている、という事なのだろう。

「そんなに驚かないでよ、助けに来たんだってばー」

ここ最近全く驚いてなかつたから、冷静さの取り戻し方を忘れてしまつたのだろうか？ どうにも、驚きから抜け出せない。

「助けて……貴方は一体……？」

だから、こんな間抜けな質問をすることしか私には出来なかつた。

……だが、私は一つ、嘘をついた。

分からぬ訳じやない。 知らぬ訳じやない。

私には、彼女が誰……いや、『何』なのか、多分、分かつてゐる。

彼女は『希望』だ。

それも、私から『本物の希望』を奪つたために『えられた、『偽者の希望』。

『本物の希望』が、慈愛によつて誰かから差し伸べられた手ならば、この『偽者の希望』は悪意によつて無理矢理私の手を掴み、引きずり込む手なのだ。

私が抵抗しても、それ以上の力で私を絶望へと引きずり込んでしまう。

……それでも、私は期待してしまつていた。 偽者だと知りながらも、私はその『希望』に期待してしまつている。

もしかしたら。 もしかしたら、今度こそ。

無意識の内に、昔見たアニメのワンシーンを思い出してゐた。 囚われの少女を、主人公である少年が救い出すという、有り触れたシーン。

そのたつたワンシーンですら、逃げ出す気になると困る、と云ひ理由で一度と見せては貰えなかつたが。

兎も角、彼女は私に、もっと彼女を信じさせてしまつ一言を告げた。

「私も『一緒に』……、おんな同じなんだよ」

一緒に？

一緒にとは、一体何が一緒に？

性別？ 性格？ 環境？ 境遇？

それとも……？

そんな私の心中などお構い無しに、おもむり彼女は徐に懐から一つの玩具を取り出した。

あれは……モデルガン？

小さい頃、この施設で見たアニメの中に、一二拳銃を使う少年が悪の組織と戦う作品を見たことがある。

それに影響され、良くモデルガンを二つ持つて的当てゲームをしていたので、それが何の変哲も無いモデルガンだとすぐに分かった。

「じゃ、とりあえず何発か

そつ言つと、彼女は部屋に転がっていた玩具の人形に狙いをつけ、そのまま2・3度引き鉄を引く。

パンパンパン、と乾いた音が聞こえ、人形が少し揺れる。紛れも無く、ただのモデルガンだった。

「はい、この次が重要だよー。よく見ててね」

彼女が、眼を瞑る。……かと思いきや、突然目を見開いた。

「てやつ！」

間抜けな掛け声と共に、彼女はモデルガンを握った手に力を込める。

その途端、信じられない事が、起こった。

モデルガン

彼女が握っているモデルガン。

何の変哲も無い、ただのモデルガン。……だつた筈なのに。

何故、こんな一瞬で。

私に、本当にモデルガンなのかどうかの判断がつかないほど、変化したのか。

彼女の手の中に納まっていたモデルガンは、たつた瞬き一回分の時間で、質感、重量感、大きさ、形。その全てが、変わっていた。

「動かないでね？　ま、当たらないとは思うけど」

先程まで、片手で構えて軽々と引き金を引いていたモデルガンを、何故か両手でグリップを握り、何故か慎重に、引き金を引いた。

ダンッ。

短く、先程とは比べ物にならない程の音……いや、轟音を部屋に響かせた。

見てみれば、その先の壁には丸い穴。

「……そんな」

そんな馬鹿な。

さつきまで、確かに。

ただのモデルガンだったのに。

今彼女が握っている拳銃は、紛れも無く『拳銃』になっていた。

「ね？ 言ったでしょ、私も一緒だつて」

そして、彼女も。

私と同じ、だつた。

「……貴方も、私と同じなの？ 不思議な事が出来るの……？」

分かりきつた事を、私は確認する。

抵抗する事も出来ず、この施設で生涯を過ごすと思つていた私にとって、これは『奇跡』に等しい。

彼女がこの施設……いや、この組織モジキの手先である可能性は、ほぼ〇に近いだろう。

彼女の存在を組織が知つていれば、私のように囚われ、実験されるだろうし、もし、彼女が組織に逆らう事が出来ないような『弱み』を握られて働かされているのだとしても、何故、あんなに私が逃げ

出す氣になる事を避けていた組織が、最も私が逃げ出したくなる様な手段で、私を実験する必要があるのだろうか。

……だとしたら、彼女は安全？

本当に、私を助けに来た？

彼女は偽者ではなく、『本物』の希望だつたのか？

「そうだよ、だから私と一緒に……」

そこから先は、彼女は言わなかつた。いや、言えなかつた。

「動くな！」

彼女が入ってきた、元々はドアがあつた所にぽつかりと開けられた穴から、この施設の警備員たちが次々と入ってきたから。

数は5人。……全員が、銃を彼女に突きつけていた。

「あらやー、ちょっと立ち話が長かつたかな。 やっぱ、そんなに上手くはいかないものだね」

癖なのか、腰に銃を握つてない方の手を当てて、彼女は振り返つた。

そして、自分に向けられた拳銃が、まるで存在しないかのように、ゆっくりと銃口を警備員の一人に向ける。

だが、彼女が引き金を引く前に、警備員達の持つている拳銃が、一斉に火を噴いた。

耳が痛くなる轟音が、何度も繰り返される。

その度に、彼女の体が大きく揺れた。

……そしてそのまま、彼女はその場に崩れ落ちてしまった。

「……さあ、こっちに来い」

さつきは彼女に向けられていた銃口が、今度は私の方に向く。

そんな事をしても、私が逃れようとする訳がないのに。

彼女の遺体の傍に一人の警備員を残して、私達は部屋を出た。

長い通路を、銃を突きつけられたまま歩く。

私は、さつきの少女の事を思い返していた。

彼女は、死んだ。 撃たれて、死んだのだ。

防弾チョッキを着ていたのなら、もしかしたら、拳銃で撃たれた程度では死ないのかもしない。

だが、防弾チョッキを着ていた様子は無いし、防弾チョッキは重いらしいから、彼女のような女の子が身に着けられるものでは無いだろ。ひ。

……もしかしたら、私をここから連れ出してくれたかも知れないの。こ。

そこまで考えて、私の思考は中断された。

……背後から聞こえてきた銃声によつて。

拳銃ではなく、もつと連續していく、力強さを感じる音。

悲鳴は、聞こえない。

周りの警備員を見ると、険しい顔付きで、通路を振り返っていた。

結構な距離を歩いてきたので、私の部屋はもう見えなくなっている。

……だが、その『見えないぐらい結構な距離』から、またも銃声が聞こえ、私の隣で立っていた警備員が崩れ落ちた。

続けて、もう一回の銃声。

今度は、私の後ろで銃を突きつけていた警備員。

何が起こっているのか漸く理解した最後の警備員も、何らかの行動を起こす前に、体を一発の銃弾に打ち抜かれ、動かなくなつた。

呆然として、私は通路の真ん中に立ち竦む。

コツコツと、私の方に歩いてくる足音だけが、耳に響いていた。

モデルガン（後書き）

約1ヶ月ぶりの投稿になってしまいました。

……はい、サボってました、すみません。

R - 15の方に投稿しておけばよかつたと後悔する今日この頃です。

「アハハハ、驚いた？」

彼女が私の目の前で笑っている。

撃たれて、倒れたはずの彼女が。

「……おーい？　だいじょぶー？」

彼女は確かに私の目の前で撃たれ、死んでしまったはずだったのに。

……そういえば、彼女が倒れた時に、血は出でていただろうか？　確か彼女も、説明のつかない事が出来るんじゃ無かつたか？

しかし、私にはモテルガンを本物の銃に変えることなんて出来ないし、撃たれても平氣で立ち上がる事なんて出来ない。　一体彼女は何をした？　いや……何をすることが、出来る？

「んー……、つえい！」

パチーン！と、手を打ち鳴らす音が、無機質な明かりの灯つた廊下に響き渡り、私の思考が中断される。

驚いて顔を上げると、彼女が、屈託のない笑みを浮かべていた。

「えへへへへ……、種明かしは後でするから、今は早くここれから出よっ？」

そう言つや否や、強引に私の手を取り、彼女が走り出す。

まだ震えの治まらない足では上手くついて行くことが出来ず、その上、急に引っ張られてすぐに対応出来るはずも無いので、足を縛もつさせ、何度も転びそうになりながら、彼女についていく。といふか、彼女に引っ張られる。

こうして、私を10年以上もの間閉じ込めていた『施設』から。こんなにも簡単に。こんなにも急に。こんなにも非現実的に。

私は、救い出されたのだった。

施設の中に入りっぱなしで、殆ど運動らしい運動をした事の無い私は、外に出て少し走つただけで、大木に凭もたれ掛かっていなければ立つていられないほどに体力を消耗していた。

対照的に、まだまだ元気一杯といった様子の彼女は、困ったなあ。といった表情で私を見る。

「大丈夫？『ごめんね、ちょっと速過ぎた？』

今にも死んでしまいそうな私の顔を覗き込み、彼女が聞いてきた。

だが、それに答える体力すらない私は、黙つて「クククと頷くしかなかつた。

「そつかあ……、もう少しこなんだけど、それならちよつと休もつか

そう言つて、彼女はスカートが汚れるのも気にせず、座れそうな大木の幹に腰を下ろす。

残つた力を振り絞り彼女の隣まで行くと、私も崩れ落ちるように座り込む。彼女が慌てたように走ってきて来た。

「あ、貴方、は？ どう、し、て」

息も絶え絶えに、彼女へ質問しようとすると、彼女の手に遮られてしまつ。

「まあまあ、もう少しあと休んでからこじよつよ。ね？」

霞む視界の端で、そう言つて彼女が微笑むのが見えた。

そのまま暫く座つている事約10分（体感時間）。ようやく息も整つて来た所に、彼女が水筒を手渡してくる。

有難く頂戴し、乾いた喉を潤して一息ついた。

「それで、その、貴方は一体……？」

「今まで世話をなつておきながら、やつと出た言葉がこれである。

人と「ミコニケーション」を取つたことが殆ど無い私には、話しに入る前の礼儀や、お礼の仕方なんかは分からぬのだ。正直、知らない人と話すのは随分久しぶりなので、相当ビクビクしている。

「私？ 私はねえ……んつふふふふ」

なんだか気持ち悪い笑い方をしながら、彼女が幹から勢い良く立ち上がつた。

「暗号名 フェイク・ロレックス
『正規贋作品』！ 蓮葉 はすば
董 すみれ とは、私の事よつー…」

彼女が自信満々に腕を組み、言い放つたその言葉。

私は、

「……暗号名と書いておきながら、本名まで言つたら駄目なんじゃ
ないですか？」

「あつ」

とりあえず、突つ込みたかつた。

『正規賡作品』（後書き）

約4ヶ月ぶりの更新ですね、ハハツ。

アクセスは当然のだろうな・・・なんて思つてたら、今でも読んで
くださつている方が居る事に感動してしまいました。

皆様どうもありがとうございます、これからはもっと早く更新でき
るように頑張りますので、どうぞこれからもよろしくお願ひします
！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2186m/>

世界の爪弾き

2011年10月7日02時37分発行